

特集にあたって

田口 東

本号の特集は大学入試と大学問題についてである。大学にとっての入学試験の役割は、教育的には高等学校までの勉学の達成度を調べることに、将来それぞれの分野で力が発揮できるかどうかの適性を調べることであり、事務的には設備や教育効果から定まる人数内に入学者を制限することであろう。前者のふたつの能力を調べることは厳密に区別できるものではないが、国公立大学においては、共通1次試験（センター試験）実施以来、それによって高校までの勉学の達成度を調べ、各大学ごとの2次試験において学科科目の選択、小論文、面接等の工夫を行ない、将来性も調べようとしている。

しかし、現実にはこのように理想通りにはいかず、共通1次試験や大規模な模擬試験の学力偏差値による大学の序列化と、受験生が自分の偏差値で合格可能性の高い大学を選ぶ、いわゆる輪切り現象が大きな問題として指摘されている。さらに、難しい試験に合格した達成感と、その他の志望動機が希薄なことから、入学後に勉学の目標を持っていない学生が年々多くなっているという声がある。日本の高等教育の中心的な大学においても聞こえている。

このことは、大きくは日本の画一的な学歴社会の反映であるといえるが、より具体的には、全国的な規模で入学試験に関係するデータを収集し、合格可能性を算出している受験産業（とそれを利用する人）のせいであるともいえる。このような問題を教育理念といった正面から論ずることは本誌の守備範囲ではないかもしれないが、前述のような受験産業の活躍をみるにつけ、オペレーションズ・リサーチが得意とする手法を生かした実証的な議論ができるのではないと思われる。

山田氏の「共通1次学力試験における受験者の学力特性」は、試験の結果を合計点ではなく各科目の得点のプロフィール（学力型）でみることを提案している。実際の受験生の科目ごとの出来不出来は驚くほど大きいこと、また、2次試験に課する科目の変更に対応して受験生の学力特性の構成比が明瞭に変化した学部例が示さ

れる。

鈴木氏の「客観式テストを用いた大学入試選抜シミュレーション」は、普通の学力試験の範囲内で、新しい選抜方法を考案したときに、どのような学力タイプの受験者が合格するかをシミュレーションによって検討する方法を提案している。定量的な基準によって入学試験を設計するための方法論は重要であり、入試センターというさまざまなタイプの大学のデータを取り扱う立場がはじめて検討可能となったものと思われる。

私の「受験生の志望校併願データから導かれる国立大学のランク付け」は、受験生に対する第1志望第2志望の組合せのアンケート調査結果から、彼らの選好にもとづく大学のランキングを調べ、それが入学試験が近づくにつれて偏差値による序列に画一化されていく様子を示したものである。

椎塚氏による「システムとしての大学」は、さまざまな観点から大学をシステムとしてみることによって、その本質をとらえようとするものである。ここでは、外からの大学の評価イメージ、大学運営に重点をおいた大学のSDモデル、学生によるキャンパスライフの評価について述べられている。このようにさまざまな観点から大学をみることを、それを積極的に世の中に知らせることは重要な課題であると思われる。

矢野氏による「教育計画からみた大学の役割」は、入学試験にとらわれず、広く社会経済と教育との関係をとらえたものである。戦後の日本の教育を支えてきたものは企業と家計であって、教育の効率性と平等性をよく実現するという成果をあげてきたが、その一方で、日本の企業や家計の特質から、画一的な学歴社会を生むことにつながったと論じられている。さらに、これからの高等教育の役割が個性的な人間を育てることにあると述べられている。

ご寄稿いただいた5編の論文は、入学試験と受験生の学力の関係を定量的にとらえようとする技術的なものから、社会経済環境における教育の役割を論じ、現状の問題を指摘したもので広い範囲の内容となっている。入学試験制度を良くするためにはさまざまな側面からの検討が必要であるが、このようにわかりやすいモデルと定量的な検証にもとづいた議論が重要であると思われる。